

声上げたいなら「ハイ」へ

原発と世論

金曜日(6月30日)のデモ

雨上がりのアスファルトを西日が照らす。もう何度目だろう。紫野明日香さん(40)＝東京都三鷹市＝は古ぼけた黒色のマイクを握り、スイッチを入れた。

金曜日の六月三十日午後六時半、東京・国会議事堂前の坂を下った一角。名を「希望のエリア」という。「さいかどうはーんたいい、いのちをまもれ」。紫野さんが叫ぶと、今夜も広場に集まった百五十人ほどが声をそろえて続いた。

「希望のエリア」はちょうど五年前の金曜日、二〇一二年六月二十九日のできた「ファミリーゾーン」が始まりだ。原発再稼働に反対する市民による官邸前抗議行動(金曜日デモ)がピークに達し、最大二十万人(主催者発表)が集ったその日、子供連れの参加者の

安全のために設けられた。

紫野さんはシングルマザー。十年前に離婚し、女手一つで一人娘の風花さん(20)を育て上げた。仕事や子育てに追われ、原発のことなんて考えたこともなかった。だが、一年前の福島第一原発の事故後、当時、中学二年生だった風花さんがふと口にした。「わたし、お母さんの年齢まで生きられるのかな」

(子どもにこんな不安を抱かせる原発を動かしているのか)。以来、毎週欠かさずデモに足を運ぶようになった。

あの夜、紫野さんもファミリーゾーンにいた。老若男女、年齢も職業もさまざま

① 希望のエリア

「脱原発」官邸前抗議行動 複数の市民グループでつくる「首都圏反原発連合」が2012年3月、関西電力大飯原発(おおい町)の再稼働方針に抗議しようと毎週金曜日に首相官邸や国会前で始めた。参加者は当初数百人だったが、ネット上の呼び掛けなどで徐々に増え、同6月29日には主催者発表で20万人に膨らんだ。大飯原発は同7月1日にいったん再稼働したが、その後も原発なき社会を求め、抗議を続けている。官邸前に呼応する形で、同様の動きは全国各地に拡大、現在も数十カ所で継続している。



「希望のエリア」で思いを語る紫野明日香さん(中央)＝6月30日、東京・永田町で

男女、年齢も職業もさまざま。まな人々が「原発はもういやだ」という思いだけを重ね、吐く息の音が聞こえるほどにへし合う。「これだけの人気が持ちこたえられなくなるなんて」。生まれ初めて見る光景に身震いした。

その後も金曜日がくるたびデモに通い続けた。陣取るのは決まってファミリーゾーン。他の場所より、幾分、のんびりした「ゆるさ」が心地良かった。

世間の注目が薄れ、参加者が減り続けても、落ち込むことはない。「ずっと怒り続けるなんてできない。来なくなった人たちが原発を認めたわけじゃない」

人数が減った分「わたしも声を上げたい」と壇上でマイクを握る参加者が増えた。三年前の二月、「怒りだけでなく希望を見つけられる場所に」という意味を込め「希望のエリア」へと名を変えた。

変わらないのはその、ゆるさ。ダンスをしたり、歌を歌ったり、やりたい人がやりたいように意見を表明する。偉い政治家だろうが、マイクを握るのは先着順。ハイトでなければ何を言ってもいい。「原発に賛成ならそれでいいんです」

英国ロンドン中心部の公園に十九世紀から続く「スピーカーズ・コーナー」と呼ばれる場所がある。誰でも政治や社会への意見をの申すことができ、かつて、マルクスやレーニンも自説をぶったところ。言論や思想の自由、民主主義のシンボルとも評されるころだ。

「希望のエリア」はまるで日本版スピーカーズ・コーナーのよう。「民主主義のシンボルとかそんな大げさなものじゃなくて、自分たちの思いを伝え続けたいってだけ。声を上げたくなったらいつでもここへ来てほしい」。あの夜の人々の思いが根を張る場所で、さうりとう言った。

「脱原発」の世論を象徴する金曜日デモが最高潮に達してから五年。デモ参加者は減り続け、原発再稼働は相次ぐ。人々が重ねた思いはあだ花だったのか、それとも。あの夜の熱気の今を追った。